中国留学体験談

―法学部２部　原田大輔君へのインタビュー―

法学部
鄭　　高咏

わたしは2002年４月から１年間原田大輔君に中国語を教えました。当時，原田君が在籍していたクラスは全員がまじめで，真剣に中国語の学習に取り組んでいて，今でも鮮明な印象が残っています。１年生の中国語を担当していた故浅井加葉子先生との出会いや先生の熱心なご指導のお陰だと思います。2001年11月に原田君は中国語コンテストに出場し，みごとに優勝しました。正直に言いますと，共通科目としての中国語を担当しているわたしは，法律を専門としている原田君の中国語に対する情熱にどのように対応し，どこまで指導すればよいか，私なりに躊躇したところがありました。では原田君自身，中国への留学に迷いがなかったのでしょうか，実際中国に行ってどうだったのでしょうか。これらの点について原田君に尋ねてみましたので，お聞きください。

鄭：まず，中国留学のきっかけを教えてもらえますか。

原田：きっかけは一年生の秋学期に，外国語コンテストに出場した時です。コンテストの表彰式で矢田先生と初めてお会いしました。その時に交換留学の制度があることを教えていただきました。それ以来，留学に興味を持つようになりました。特に当時大学の講義で，中国語を教えていただいた浅井先生に強く勧められました。ですから私にとって中国に留学するという選択肢は，入学当初からは到底考えられない事でした。

鄭：中国への留学を決めた際，迷いはなかったですか。

原田：交換留学の試験を受けるかどうか迷ってる時に，姉に「チャンスがあるなら，挑戦しないのは損だ」と言われて，迷いが吹っ切れました。特にこれという目標は無かったんです。どうせ勉強するなら，とことん勉強したいと。そもそも私が中国語を選択した理由も，特にこれといってないんです。

私は中学，高校時代は英語が本当に嫌いでした。私の高校は科目選択が自由なのも手伝って，英語は全然勉強をしてなかったんですよ。卒業に必要な最低限の科目しか履修せず，後は倫理や政治経済，日本史等の社会科の科目ばかり選択してたんです。なぜかというと，外国語を「やらされている」という感覚があって，それが好きになれませんでした。大学の入学時に語学の選択をする必要がありますよね。その時に中国語を選択しました。

「なぜ中国語を選択したの」と，今でもよく聞かれます。私の専攻は法律ですし，法学というとドイツ語と思われるでしょう。私自身も最初はドイツ語にするつもりでした。でもアルファベットを見るのが嫌で。そうなると韓国語か，中国語しかないですよね。じゃあ，その中で中国語を選んだのはなぜかというと……本当に，ただなんとなくなんです。強いて挙げるなら，小さいころ母方の祖母に進められた本の影響……本当にそれぐらいです。ただ自分自身で選択した語学だけは，たとえ何語であれ一生懸命勉強しようと思いました。やはり初めて自分の意志で選択した外国語ですから，途中で投げ出すような事だけは絶対にしたくありませんでした。

鄭：今まで中国に一度も行ってないですが，実際行ってどうでしたか。具体的な感想を聞かせてください。

原田：そう，初めてなんですよ中国。実は私は今まで日本から出た事もなく，中国が初めての外国。そういった意味では行く前からすごく楽しみでした。今でも忘れられないのは，中国に到着した初

日です。大学の受入期間の関係で，天津までの直通便が使えなかったんですよ。韓国経由で行くか，北京に降りて天津まで行くか。中国に行く訳だし，どうせなら北京経由で行こうかと思いました。着いてみると大変で，バスを乗り継いでの移動。今から考えたら，とても信じられません。後から聞いた話によると，大学に迎えを手配する事もできたらしいのですが。この初日の経験は，後に中国で生活していく時に大きな自信になりましたね。

中国での生活で慣れるのに苦労したのは，講義が始まる時間がとても早いということですね。朝８時から講義なんですよ。私は夜に大学へ通っていたので，これには慣れるまで苦労しました。それでも慣れてくると楽しいものでした。大体の講義は午前中だけでしたので，午後は勉強したり，お茶を飲んだり，友人と街に出掛けたりと，楽しく過ごす事が出来ました。

鄭：現地での講義について紹介してもらえますか。

原田：講義も楽しかったです。最初は初級２班でした。初級班は楽しかったですね。皆が分からない事だらけだったので，お互いに助け合うという雰囲気がありました。

最後の半年は高級班で講義を受けていました。初級班とは違い，緊張した空気の中で毎日講義が行われました。特に印象にあるのは，作文の時間です。最初の講義で先生が「君たちの話している中国語は，文章にすると半分しか意味が通じない」と，言われた時です。ショックでした。確かに語学は話せるようになれば終わりじゃないと思います。「書く，聞く，話す」が三位一体となって，ようやく形になるのだとその時実感しました。それから，できるだけ毎日中国語で日記をつけるように心がけました。講義も中頃にさしかかった５月に，先生から「文を書くのが上手くなった」と言われたのが嬉しかったです。

当初高級１班の中で私の出来は悪い方でしたので，最初のうちはひたすら挑戦の毎日。それでも充実感は何倍も感じました。例えば自国の建築の特徴，例えば自国の民間故事や昔話の発表は楽しかったです。口語や作文の時間は一番楽しかったですね。自分を表現すること，自分の国を表現することには特に力を注ぎました。

一番厳しかったのが文法の時間です。南開大学の高級班には，素晴らしい文法の先生がいました。大変情熱のある先生で，当初全く駄目だった私の文法も，その先生のお陰で，大分良くなりました。

鄭：今振り返って最も良かった点はなんですか。

原田：とにもかくにも中国茶と出会えた事ですね。最初に言った通り，中国へは語学を勉強しにいくという漠然な気持ち。つまりなんとなく流れに乗って行ったんです。ふとある時に，語学だけを勉強するのに苦痛を感じるようになりました。当然語学の勉強を目的にするのは素晴らしい事ですが，私の場合は，はっきりとした方向性が定まっていませんでした。最初の１ヶ月は常に自己嫌悪との闘い。やがて，自分には何も無いと気づかされたんです。その時，相手の国の言語を学ぶためには文化を知らなくては駄目だと思うに至りました。では，何をしたらよいのか。私は中国茶が好きなので，お茶の歴史や，点て方を勉強しようかと思いました。古文化街で安い茶器を値切って買い，お茶葉を買い，自分の部屋で練習しました。本で見たり，お店で見聞きした見様見真似でしたが。

その後韓国人の友人にお茶を出したところ，大変好評で，宿舎内に噂が広がりました。やがて多くの人にお茶を出しているうちに，一つの事に気付きました。お茶を通して自分の中国語が上達していたのです。最初は「お茶を点てる側が話ができないとまずいな」と思い，勉強量を増やしたのがきっかけでした。

ある日，タイ人の友人が急に日本語で「お茶さん」と話しかけてきたんです。日本語を勉強し始めた学生さんで，お茶が好きだから「お茶さん」だそうです。とても嬉しかったのを覚えています。今年７月に帰国するまでの一年と少しの間，宿舎では中国茶といえば私のこと，つまり「お茶さん」と皆に言ってもらうまでになりました。「お茶さん」と呼んでもらうこと自体は，そんなに重要じゃ

なかったんです。大切だったのは，一番良かったのは，一杯の中国茶を通じて多くの国の人と出会えた事，一晩中話をしたことは，今でも忘れることのできない財産です。

去年の国慶節に本格的な茶器を買いました。それから徐々に茶器を買い足していき，帰国前には，とても多くの茶器と茶葉がそろいました。その茶器や茶葉に全ての想い出が詰まっています。

一杯のお茶は，ささくれ立った私の心を癒してくれましたし，多くの人とも知り合えました。まだまだ未熟ですが，これらの経験や出会いを通じて，留学当初より中国語も上達しました。

とにかく中国茶ですね。お茶抜きでは今回の留学は有り得ませんでした。

鄭：カルチャーショックは？

原田：留学当初から何も感じませんでした。初日に何とか大学について，食堂で食べた晩ご飯の味は今でも忘れられません。大げさな話ですが，一口ご飯を食べた時に，あの激動の到着時のことが頭をよぎり，その時初めて「この国で生きていける」と，思いました。食に関しては何も問題なかったです。なにしろ初めての中国，初めての外国ですから，周りが知らない事だらけ。慣れる事に必死で，カルチャーショックを感じている暇はありませんでしたよ。

鄭：今後どのように中国での経験を活かしますか。又，中国語と法律を結びつけていく予定は？

原田：今は，法律と中国語を結びつけるというビジョンは，明確に浮かんでません。最近は司法通訳というのがありますよね。まぁ，それも一つの選択肢だと思います。でも，私には夢があるんです。機会があれば今一度中国に留学し，本格的に中国茶の勉強がしたいです。そして，小さくてもよいから，中国茶のお店を開きたいですね。留学にあたって，家族，愛大の先生方，国際交流課のお世話をしてくれた方々，留学先の先生方，友人と，助けてもらってばかり，与えてもらってばかりでした。今度は，勉強させていただいた中国語，現地での経験を活かし，お茶という形で少しでもいいから皆様にお返しをしたいと思ってます。

鄭：最後に一言お願いします。

原田：まず，私の留学を支えていただいた，家族，先生方，大学職員の皆様，友人に深く御礼申し上げます。

愛大は中国で，特に天津では有名で，高い評価を受けています。これも，我々の先生，先輩方の努力により培われた伝統だと思います。留学している時は，我々の一挙手一投足が大学の評価につながります。現地では，愛大生という誇りと責任を感じて勉強をしてほしいと思います。本日は有り難うございました。

・・・現在，原田君とわたしとの会話は全部中国語で行っています。わずか１年間だけの留学でしたが，その中国語の流暢さに感心する限りです。

世界で一番好きな歌手

経営学部
山本　大造

みなさんにとって，「世界で一番好きな歌手」は誰でしょうか。しかも，その人の楽曲や声を聞くだけで，ふるえ立つような感動を覚えたり，しみじみ感慨にふけったり，心に残る風景を思い起こしたり，鳥肌の立つような勇気に満ちた気分になったり，人との出会いや思い出を振り返り，素直な自分を取り戻したりできるような。そんな歌